

手取り王と我々いす。

作品名 Dissolution
著者 C. J. Sansom

〈概要〉

十六世紀前半のイングランドを舞台としたミステリー。弁護士シャードレイクは、国王代理クロムウェル卿の命を受け、元同僚の惨殺事件を調査していくうちに、世間と隔絶された修道院の秘密を知ることになる。そして発生する第二、第三の殺人。カトリックを信奉し、国王至上法に反対する修道士の抵抗か？殺人の動機に、宗教改革に揺れ動く当時の社会が複雑にからみあつていく。

一字あげ

〈主要登場人物〉

マシュー・シャードレイク
マーク・ポエル
クロムウェル卿

三十五歳
弁護士 三十代後半

シャードレイクの助手

ヘンリー八世を補佐する国王代理及び総主教代理

辞書にありますか？通話？

フブけて

ほとんど登場しないので不要です。

フアビアン修道院長

エドウィグ修道士

ガブリエル修道士

ガイ修道士

ヒュー修道士

ジュード修道士

モルティマス修道士

アリス・ビューテラー

サセックス郡スカンシーの聖ドナトゥス修道院の院長

経理担当

式典及び先唱担当。教会の修繕及び装飾も担当する。

医療保健担当。薬剤師の資格を有する。ムーア人

侍従長。修道院の家事を切り盛りする。

支払担当。請求書、修道士、召使の労賃等の支払いを行う。

修道院副院長。修道見習の管理監督を担当。スコットランド人。

ガイ修道士の助手。看護士

師の係

ジェローム修道士

カルトウジオ修道会修道士

監査官など

ロビン・シングルトン

弁護士 修道院の調査を命じられたクロムウェルの使者

ローレンス・グッドハンプス

シングルトンの補佐。教会法^{法律}弁護士。

コピンジャー保安官

スカンシーの保安官^{治安判事}

〈あらすじ〉

一五三七年、ヘンリー八世治世下のイングランドで、カトリックと決別し、国王を宗教上のトップとする国王至上法が施行され、クロムウェルによる執政が行われていた。ローマ法王のもと腐敗墮落した修道院は解散に追い込まれ、その所領は国王の財産として没収されようとしていた。

ジェーン王妃が亡くなった二週間後のこと、シャードレイクは、若い頃から共に法学を専攻し、以前にも協力してきたクロムウエル卿から、ウエストミンスター宮殿に呼び出された。改革の未来がなかった難事件を解決せよ、という命令だった。スカーンシール修道院の調査のため、クロムウエルが送った使者が頭部を切断された死体となつて発見されたという。クロムウエルは、修道院の自発的解散を進めており、本件を極秘裏に調査、^{イセウ}最終することを命じた。

ジェーンは亡くなった。

不審

あくる日、シャードレイクは、弟分のマークを連れて、スカーンシーへ出発した。父親の牧場夫の息子で、ロンドンでの就職を世話して以来の付き合いだ。二日もあれば着くが、イギリス国王の政策に反対する修道士たちの反乱もあった、危険な旅だ。シャードレイクは、亀背のために修道士になれないと悟った頃を思い出す。そのうちに、灰色の海を臨んで流れ込む河と広大な沼地が見え、手前に小さな町と一マイルほど離れた修道院が見えてきた。雪が降り始めていた。

修道院は、大聖堂ほど巨大な教会と高い壁に囲まれていた。奥行三百フィートはあり、百フィートほどの二つの塔を持つ。その左に居住地、作業所、ビール醸造所などが立つ。中庭は、商人や召使たちが話している。右側には修道士宿舎、薬草園と衛生所があった。かつては栄えた修道院も、現在は、三十人の修道士と六十人に満たない召使たちがいるにすぎない。

②

フロットと直接関係はないので、省略してしまおうが、つましります。

モルティマス副院長に案内されたシャードレイクとマークは、一人だけ白い修道服を身に付けたジェローム修道士と出会う。ジェロームは、「剣をとったものは剣によって死すことを知れ」と言い残して消えた。クロムウエルの命令で処刑されたロンドンのカルトウジ才修道会の生き残りであった。

「修道会が処刑された」とは言いませんか？ 工夫をしよう。解散させられた修道院、など。

シャードレイクは、恐怖に憔悴しきつたシングルトンの補佐役グッドハップスに会い、^薄ほど修道院に腐敗はなく、あせつた。シングルトンは事件の直前に会計帳簿を見ていたこと、事件の起きた午前5時前に誰かに会うことになっていたらしいこと、事件の起きた厨房は鍵がかけられていたことを知る。厨房の鍵をもっているのは、修道院長、副院長、^カイ修道士、門番の四人だけだ。

初見、ある案

シャードレイクは、第一発見者のガイ修道士に会い、衛生所の部屋に宿泊することにす。その夜、死体を検分し、犯人は中背で、凶器は刀剣と推測する。その切り口は、元王妃アン・プーリンの処刑を想起させるものだった。その夜、修道士たちと夕食をともにしたシャードレイクは、エドウィグ修道士とガブリエル修道士が教会の補修をめぐつてもめていることを知る。シングルトンの調査の^{おさらい}を申し出ると、エドウィグ顔が曇った。

9、

表記は統一
するよ。

不要

前文と主語が同じ場合は省いたほうがよいでしょう。

シャードレイクはアリスとともに湿地帯を探ることにした。道すがら、シャードレイクはアリスに、マークはこの仕事が終わったらロンドンで復職するのでこれ以上近づいてはならないと諭した。シャードレイクは、刀剣の制作者をつきとめるためロンドンへ行くことにした。部屋に戻ると、マークが食器棚に閉じ込められていた。食器棚の中には、覗き穴があり、その奥には秘密の通路があり、保護房に通じていた。さらに厨房までつながっていた。この秘密の通路が厨房へ通じているということは、シングルtonsの殺害に使われた可能性がある。この通路の存在を知っているのは、ガイ、副院長、エドウィグ、ガブリエル、ジュード、ビューだ。

初出、唐突

シャードレイクは、ある液体からガブリエルが通路を使っていたと判断し、教会へ行き、再び尋問した。そのとき、突然、上から彫刻が落下して、ガブリエルはシャードレイクの身代わりは下敷きとなった。マークが教会の上にいるのを発見した。上へ昇る階段は二つしかない。教会の上階までそれぞれ昇っていったが誰もいない。そのとき、シャードレイクは、三つだった彫刻が四つになっていくことに気づく。一つは修道服を着た生身の人間だったのだ。気づいたときはすでに遅く、犯人は階下へ走り去っていた。犯人は、シャードレイクを待ち伏せていたのか、それとも別の用事があったのか？

実際には犯人は別の誰かです。
「犯人として処刑された」ほど。
表現を工夫しよう。

シャードレイクは、刀剣の制作者を特定し、クロムウェルに真実を確かめるために、ロンドンへと向かった。ロンドンに着いたシャードレイクは、クロムウェルの面会を取り付けると、ロンドン塔の武器担当を訪ね、刀剣の制作者がジョン・スミートン、アン王妃の愛人であったマーク・スミートンの父親だったことを知る。クロムウェルは、アン王妃の処刑に纏わる謀について語り始める。シングルtonは、マーク・スミートンを尋問し自白に至らせた張本人だった。ジェロームの話は真実だった。

主語の重複

ジョン・スミートンは、マークの死後すぐに亡くなった。その遺産として刀剣を引き継いだ者は誰か。シャードレイクは、スミートンの家を老女が尋ねたことを知る。シャードレイクは、犯人とその動機を悟る。そして、ロンドン塔に戻り、マーク・スミートンに面会をした者の特徴を報告するよう依頼して、スカンシーへ戻った。

修道院に戻ると、院長を通じて、修道院は解散しないという噂を広める。誰かが動き出すはずだ。シャードレイクは、そのとき、教会の修繕再開を頑なに拒み、逆上したエドウィグ修道士を保護房へ入れるよう命じた。

ロンドンからの使者がきた。シングルtonを殺害したのは彼女だった。アリスの母親の旧姓はスミートンで、マーク・スミートンはいとこであり、恋人だった。刀剣を相続したのは母親で、母親の死後、アリスが保有していた。情報提供者を装ってシングルtonをお

彼女ではわかりませんが、
「ニゴアリスと
明記しよう。」

もう少し丁寧に。
使者が知らせたのは何だったのか、
じいからアリスの告白なのかを明確に。

エピソード、つまりその後には
ガイと再会し、マークとアリスが
フランスで暮らしていることがわかった
ことも加えましょう。

マークに危害を
加える気は無いの
で、河から「ナイフ」を
つつかた「ナイフ」の
表現に「ナイフ」を
加えましょう。

↑ シャードレイクは、二人はベッドに縛り付けられ、二人は、雪が解け始めた湿地帯へと向かった。
↑ シャードレイクは、二人はベッドに縛り付けられ、二人は、雪が解け始めた湿地帯へと向かった。

事実と異なり、
手足を縛られただけです。

理由、つまりクロウエルに没収された
のを恐れて、説明も加えましょう。

ガイに助けられたシャードレイクは、湿地帯へと向かうが、そこは湖のようになっていた。水には二人が持っていたランプが浮かんでいた。その後、ジェロームを発見したシャードレイクは、シングルトンの殺害時に教会の遺物を盗んだのは、ジェロームだったことを知る。そして、教会の鐘楼に潜むエドウィグを発見する。二年前に女性を殺し、サイモンに毒を盛り、ガブリエルに彫刻を落としたのは、エドウィグだった。教会の鐘楼に金塊を隠したエドウィグは、シャードレイクとの格闘の後、逮捕される。

鐘楼から落下して死にます。
事実とは異なります。

〈概評〉

全体を通じて、主人公である弁護士の一人名で物語は進む。主人公と助手の二人組は、探偵小説の定番だが、助手が主人公の言いなりにならず、最後は犯人と逃亡してしまうところは、おやつと思わせる。

舞台設定が秀逸だ。修道院を舞台とした小説は他にもあるが、本書は、十六世紀のロンドンという歴史的にもイギリスの大きな転換期に当たり、宗教的にも社会風俗的にも混沌とした時代を選んだことで、歴史小説、宗教論としても成功している。歴史的事実や実在の人物、事件を殺人の動機や登場人物の思想・生い立ちにからめており、歴史好きにはたまらない。また、本筋とは別に、当時のロンドンの社会や生活の変化（例えば、街頭往来の様子や印刷技術普及の影響、ブルジョア層の台頭など）を効果的に織り交せており、目に浮かぶように詳しく描写されている。

難を言えば、探偵小説としては平凡であることだ。容疑者の情報や動機の候補は数々集められていくが、一向に絞り込まれることなく、探偵小説らしい謎解きの醍醐味は味わえない。だが、主人公のロマンスや教会での犯人追走場面など、映像化も意識されており、歴史エンターテインメントと思えば、一級品に近いと言っていいたいだろう。

主人公は、懐かに思いを寄せただけで
ロマンスとは言えない気がします。

謎の手は評価に迷います。

もう少し全体の評価をフランスかマイ
かに評せてわかりやすく伝えましょう。

このふたつのことは、はかばか
灯籠に近い印象を身えるので

あーまい

行方不明に
なっていたことが
どこにも書いてありません。
※謎解きの部分の「わや」おぼろげなもので、丁寧に書き直そう。